

**国立大学法人等施設の長寿命化に向けたライフサイクルの最適化に関する検討会及びWG  
前回までの主な御意見**

会議	御意見	対応
<b>第 7 回検討会 (12/21)</b>	外壁のタイル張りについて、タイルの落下は人命にかかわる事故のリスクがあり、安全面に関する注意喚起は強調すべき。	第 3 章（3）に追記・修正 第 4 章（2）に追記
	外壁の塗装や仕上塗材の更新はかなり年数がたってから行われているが、美観や人の快適性も重要。	第 4 章（1）（2）に追記
	劣化状況評価について、特に防水は、B（部分的に劣化）の次に C（広範囲に劣化）が起きて、次に D（具体的な不具合が発生）が起きるというわけではなく、B の次に D になる可能性もあるので、なるべく事後対応にならないように注意する必要がある。	第 4 章（2）に追記
	B と考えていたら漏水が発生し、貴重物品を破損させてしまった場合、取り返しのつかない状態にもなり得るので、そういった被害を出してしまう可能性があることについてのリスクマネジメントが必要。	第 4 章（2）に追記
	外壁の塗装・仕上塗材について不具合発生 の例示が漏水となっているが、塗装・仕上塗材が劣化してコンクリートの中の鉄筋がさび、それによるひび割れが起きて、コンクリート片が落下することもある。	第 4 章（2）に追記
	建物ごとに、今の計画の更新年数と比べて、良好な状態かどうかを調査した上で、修繕なり、改修の時期を延ばす等の判断が行われるべきと思うが、今は事後になっている状況なので、大学の施設を長寿命化するのであれば、定期的にそういう調査を行うべき。	第 4 章（1）に追記
	大学の建物は途中で増築している建物が多くあるので、いつ建てた建物か、いつ工事したものが、時期によって仕様等が異なることにも注意が必要。	第 3 章（2）に追記・修正
	維持管理においては、不足だけでなく過剰に交換するといったことも避けなければならない。そのためには、適切な劣化診断を行うことが重要。	第 4 章（1）に追記

会議	御意見	対応
<b>第7回検討会 (12/21)</b>	建物全体としての長寿命化を図り、80年から100年を目標として、20から25年で性能維持のための改修をするということと、部位別の更新が例えば30年、40年という数字が出てきたときに、この関係をどういうふうに見るのか、部位ごとにある年数を統合し、個別の施設の長寿命化計画にどう生かすのか、どうリンクさせるのかをしっかりと伝えるべき。	第3章（3）に追記・修正
	最先端の研究をするためには施設への要求がどんどん上がっていく、それへの対応ということも含めて最先端への改修事例があるとよい。	第2部に「新たな研究分野の確立に向けた施設の改修」事例を新たに追加
	施設規模の10%削減を目標とする鹿児島大学の事例について、どういう趣旨、方針でこのマスタープランが策定されたのかということを追加してほしい。	第2部の「30年後の施設規模を10%削減する建替計画を策定」事例を追記・修正
<b>第6回検討会WG (2/5)</b>	本報告書における修繕、改修、更新等の用語の定義があいまい。国土交通省、日本建築学会、参考文献（「建築物のライフサイクルコスト」）それぞれにおいて用語の定義は若干異なるため、本報告書における用語の定義を見直した方がよい。	本報告書における用語の定義を見直し
	今回の報告書全体としてのスタンスをどこかに記載すべき。	報告書巻頭「はじめに」に、本報告書の目的を追記
	第4章（1）部位別の使用年数分布グラフにおいて大事なものは、改修判断時と着工時に開きがあることであり、このインターバルをいかにして近づけるかである。今の見せ方では、参考文献（「建築物のライフサイクルコスト」）との差に焦点が当たりすぎてしまうのではないか。	第4章（1）に追記・修正
	「東北大学」及び「北見工業大学」の保有施設の総量最適化の実施事例について、大空間を確保するにあたって、壁の位置をずらしているように見えるが、間仕切り壁であったのか構造壁であったのか。構造壁であった際には、耐震性の確保を行っている旨補足が必要ではないか。	第2部の「東北大学」及び「北見工業大学」の事例を追記・修正